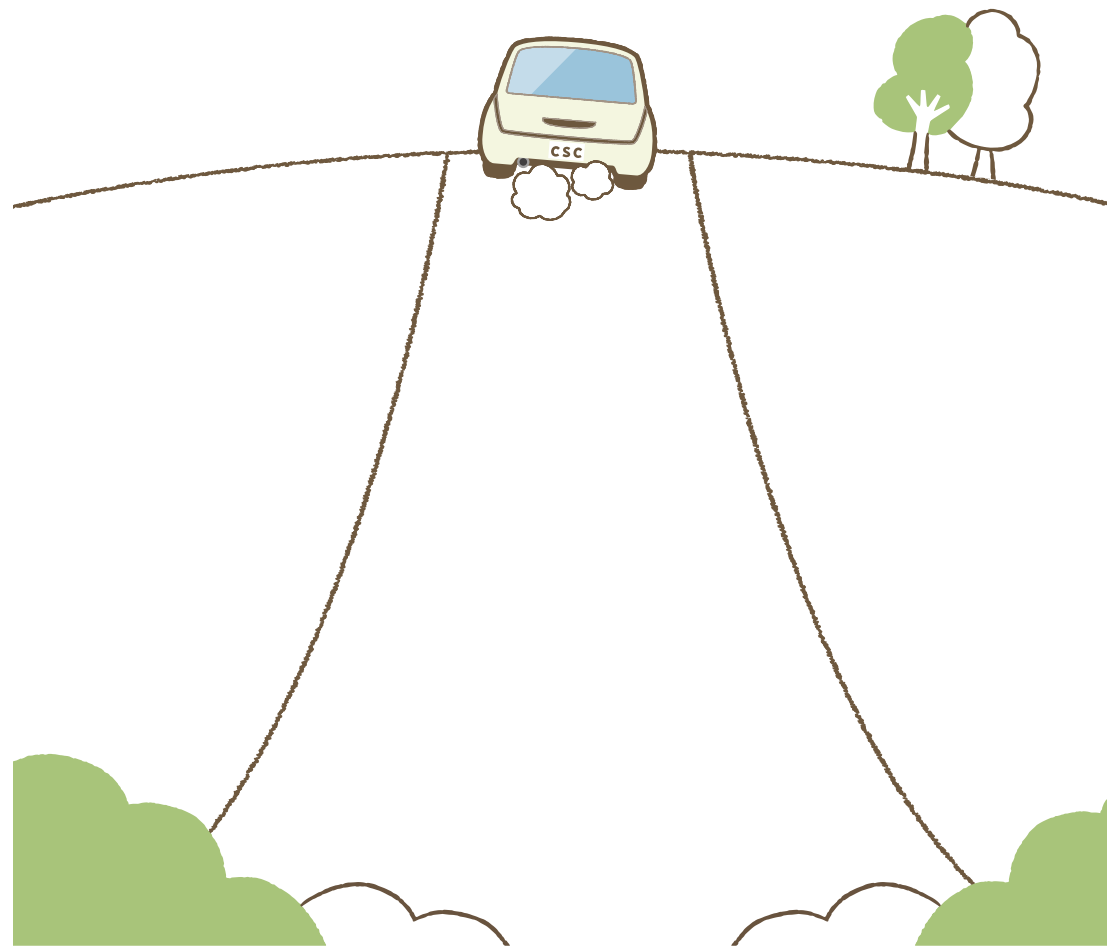


石巻市社会福祉協議会

CSC 10TH Anniversary

地域福祉コーディネーター

活動記録集



石巻市社会福祉協議会
CSC 10TH Anniversary
地域福祉コーディネーター
活動記録集

監修 日本社会事業大学大学院 福祉マネジメント研究科 講師 北川進
発行日 令和6年2月
発行元 社会福祉法人 石巻市社会福祉協議会
〒986-0825 宮城県石巻市穀町15番2号 ささえあいセンター3階
TEL 0225-96-5290
URL <https://www.ishinomaki-shakyo.or.jp>



はじめに



東日本大震災で石巻市は多くの尊い命と貴重な財産、住宅が失われました。震災後、市内に仮設住宅その後復興公営住宅が整備され、新たな環境の中で安定した生活を取り戻せた方がいた一方、心に不安を抱え自立した生活を取り戻すのが難しい方も多く見られました。

こうした中、石巻市社会福祉協議会では石巻市からの受託事業として、仮設住宅の巡回訪問を通じた復興支援業務、さらに平成25年度には地域福祉の調整役として『地域福祉コーディネーター』を配置し、自治会、民生委員・児童委員、関係機関、

そして地域住民と共に地域の支え合いの仕組みづくりや制度のみでは解決が難しい個々の課題に寄り添った活動を行ってきました。また、平成28年度からは生活支援体制整備事業における『生活支援コーディネーター』を兼務し、関係機関と連携した介護予防の話し合いの場(第2層協議体)づくりに取り組んでいます。

私も当時から民生委員・児童委員として地域福祉コーディネーターと関わってきましたが、当初10名の地域福祉コーディネーターが震災後の混乱の中、手探り状態で地域に出向き、多くの住民や関係機関のサポートをいただきながら支援活動を行っていたことが思い出されます。

この度、地域福祉コーディネーターが配置され10年が経過したことから、これまでの活動をまとめた『地域福祉コーディネーター活動記録集』を発行することといたしました。この記録集は地域福祉コーディネーターのこれまでの活動を振り返り、フェーズごとの変化や事例を分析し、そこから見えた課題を整理し今後取り組んでいく活動を明確にすることを目的としています。

現在、石巻市は震災前とは地域状況が大きく変化し、市民の生活も新たなフェーズに移行しており、個人が抱える課題も複雑かつ多様化しています。こうした課題の解決には地域住民や多機関協働による支え合い、助け合いの仕組みが必要であり地域福祉に対する期待は大きいものになっています。このため石巻市社会福祉協議会では、果たすべき役割を再確認し市民の福祉向上のため、より一層の努力をして参る所存でありますので、今後もみなさまのご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

むすびに本誌の発行にあたりご協力をいただきましたみなさまに厚く御礼申し上げ、ご挨拶いたします。

石巻市社会福祉協議会
会長 林 久善

目次

1	はじめに	01
2	年表	03
3	地域福祉コーディネーター設置の背景・役割	05
4	座談会『関係者と振り返る10年』	06
5	フェーズごとの支援の形	
	フェーズ1 仮設住宅支援期	09
	フェーズ2 復興公営住宅支援期	15
	フェーズ3 地域生活支援期	21
6	これまでの10年から『これから』へ	27
7	むすびに	29
8	資料編	30



平成25年度



令和4年度

本冊子における用語の説明

- 【 C S C 】 Community Social work Coordinator(地域福祉コーディネーター)の略称。
- 【地域福祉アドバイザー】福祉・医療職経験者を配置。CSCを育成することを目的に、現場に同行し助言する役割を担った。
- 【 エリアミーティング 】仮設住宅の入居者支援に携わる関係機関が、情報共有や支援方針の協議、連携強化を目的とし実施。生活再建の段階に合わせ、復興公営住宅や既存地域を含めた住民支援を話し合う場へと変化。
- 【 多職種連携会議 】被災者支援を軸としたエリアミーティングの機能を引継ぎ、平時の地域支援において包括的な相談支援体制を構築することを目的として実施。

石巻市の状況

3月11日
●東日本大震災
(平成23年東北地方太平洋沖地震)発生
●避難所開設

4月
●仮設住宅入居開始

10月
●全ての避難所の閉鎖

●石巻市の被害状況
最大震度:震度6強
最高津波高:8.6m以上(鮎川検潮所)
津波到達時間:15時26分頃
死者:3,552名(令和2年7月現在)
行方不明者:419名(令和2年7月現在)
浸水面積:73k㎡(市域面積:556k㎡)
全壊家屋:22,357棟
半壊家屋:11,021棟
一部損壊家屋:20,364棟

平成22年度

平成23年度

平成24年度

平成25年度

平成26年度

平成27年度

平成28年度

平成29年度

平成30年度

令和元年度

令和2年度

令和3年度

令和4年度

事業名

石巻市社協復興支援事業

3月13日
●石巻市災害ボランティアセンター設置

3月21日
●福祉避難所支援活動の開始

7月
●災害復興支援対策課設置

9月
●ささえあいセンター管理運営業務開始

●応急仮設住宅入居者支援開始

●福祉避難所支援活動の終了

12月
●石巻市災害ボランティアセンターの移転

10月
●みなし仮設住宅(民間賃貸住宅等)入居者支援開始

4月
●CSC(地域福祉コーディネーター)の配置(10名)
●応急仮設住宅コミュニティ支援活動開始

○土台も何も無い自分たちに何が出来るんだろうか…
○早く自分たちの言葉で「CSCとは何か」を説明できるようにならないと

4月
●復興公営住宅入居者、防災集団移転地住民の支援開始

●既存自治会を含めた地域支援活動開始

○仮設住宅以外の地域のこと分からない
移転者を迎える既存地域とのつながりもつっていかなくや
○困っている人に対して「何か手伝いたい」と思う住民がいる大切にしたいな

3月31日
●石巻市災害ボランティアセンター閉鎖

4月
●復興支援課に名称変更

●災害ボランティア登録制度運用開始

○自分たちが解決してしまうんじゃなくて、地域と一緒に考えて動いていきたいでも難しい…
○仮設住宅から復興公営住宅、既存地域への移転また一からつながりづくりでも、いまは頼れる人もいっぱいいる！頑張ってみよう

4月
●SC(生活支援コーディネーター)の配置(13名)
※CSCとの兼務

○住まいの形は変わっても、ひとりひとりの暮らしは途切れずに続いていることを忘れないように関わっていききたいな

12月
●みなし仮設住宅(民間賃貸住宅等)入居者支援終了

10~11月
●石巻市災害ボランティアセンター設置

○これまで地域と積み重ねてきたことが、止まってしまった
頼りにしてきた人たちも動けなくなってきたこの先、どうしていけばいいんだろう
○「やるしかねっちゃ」と言われて、ハッとしたCSCの原点って、住民の想いに寄り添って形にしていこうだったよね

復旧・回復

フェーズ1 仮設住宅支援期

フェーズ2 復興公営住宅支援期

フェーズ3 地域支援期

石巻市被災者生活支援事業

ささえあいセンター管理運営業務

復興公営住宅入居者支援事業

復興公営住宅移行支援業務

応急仮設住宅管理運営業務

応急仮設住宅等生活相談支援業務

生活支援体制整備事業

復興公営住宅等生活相談支援業務



あるドラマをちょっと真似てつくったこのジャンパー。デザインも10年で3代目に。歩く広告塔として、擦り切れるまで愛用してきた私たちのトレードマーク♪



地域福祉コーディネーター設置の背景

平成23年3月11日に発生した東日本大震災によって、石巻市のコミュニティは大きく変動し、仮設住宅や復興公営住宅入居者の孤立や自死が予測されました。被災した住民が抱える課題に対する細やかな対応やコミュニティの再生を通じて、地域の見守り体制等の構築をするために、平成25年度に地域福祉コーディネーター10名が配置されました。『第2期石巻市地域福祉計画』及び本会『第2次地域福祉活動計画』に基づき、設置当初は応急仮設住宅住民への被災者支援活動の調整役として活動し、現在では復興公営住宅住民などへの支援として、既存自治会も含めた新たな地域コミュニティ形成のための地域支援活動を行っています。平成27年度には、『石巻市第6期介護保険事業計画』、『石巻市地域包括ケアシステム推進実施計画』に地域福祉コーディネーターの配置が位置付けられ、平成28年度からは地区民児協単位(16地区)を基準とし、担当地区の人口等を考慮し13名が配置されています。また、平成28年4月より生活支援体制整備事業における生活支援コーディネーターを兼務しています。

地域福祉コーディネーターの役割

地域住民によるサロン活動など、地域福祉の拠点づくりのための支援や、地区の町内会長、民生委員・児童委員等と協力体制を構築し、住民主体による地域活動への支援を行っています。また、地域住民の個別の生活相談に応じ、必要とされる支援(直接及び間接)を行うと共に、社会資源や地域特性を把握し活用していくため、次のことに取り組んでいます。



まもる

セーフティネット

生活圏域(復興公営住宅を含む)における『見守り・相談・つなぎ』を促進し、セーフティネット機能を構築、推進します。

支える

活性化とサポート

自治組織やボランティアのサポートなど、地域活動の担い手となる住民組織を側面から支え、地域活動の活性化を図ります。

つなぐ

コーディネート

様々な生活課題の解決に向け、多様な支援をつなぐとともに、支援者間の連携、横のつながりの促進を図ります。

つくる

企画や設計、実施

制度や支援の狭間にある人などが抱える生活課題の解決に向け、新たなインフォーマルサービスの構築や、担い手の育成を目指します。

石巻市社協復興支援事業 職員配置状況

(名)

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
地域福祉コーディネーター	10	10	10	13	13	13	13	13	13	13
地域福祉アドバイザー	4	1	1	1	1	1	—	—	—	—
エリア主任	16	14	13	12	11	11	9	4	4	4
地域生活支援員	114	98	86	76	63	36	11	11	11	11
生活支援アドバイザー	—	—	—	—	1	1	1	1	1	1

座談会

『関係者と振り返る10年』



配置当初から関わりのある方々に、CSCについて本音で語っていただきました。この10年間『CSCをどう見てきたのか』、『今後何を期待するのか』など、エピソードを交えながら想いを伺いました。

参加者自己紹介



アリスカ タカシ
蟻坂 隆さん

民生委員・児童委員(以下:民生委員)をしています。チリ地震津波、東日本大震災と二度被災しました。小中PTA時代には子どもたちに津波について教える活動をし、民生委員になってからは高齢者の防災も考えるようになりました。



エンドウ ヨシコ
遠藤 佳子さん

私は、生まれも育ちも石巻です。CSCのお世話になりながら、サロン活動などを行っています。現在は、民生委員もしています。



ホンジョウ ミノル
本庄 年さん

神奈川県出身で、震災時ボランティアで石巻に来ました。現在は、『おらほの家』という民家を活用したコミュニティスペースで、送迎付きのサロン活動をしています。



トダ
戸田 かおりさん

地域包括支援センター(以下:包括)で社会福祉士をしています。震災の直前に包括に異動し、この12年間、夢中で仕事をしてきました。

震災時の状況

<遠藤>

津波の被害で山際の7軒だけが残り、みんなで助け合いながらの生活が始まりました。ボランティアがたくさん来て、瓦礫を片付け、ある程度片付いたら色々『楽しむ会』を開催してくれました。それがすごく楽しくて。仮設住宅の方々にも声を掛けて、みんなで顔を合わせる機会になりましたね。その後、道路が開通し、それぞれで生活ができるようになっていきましたが、この場所はずっと孤立していたんです。

<蟻坂>

震災後、最初に民生委員の定例会をしたのが6月。小学校の体育館でした。炊出し準備している傍らで子ども用のイスを丸く並べてやりました。その後仮設住宅がだんだんできてきて、仮設訪問支援員が配置されたため、民生委員が仮設住宅を訪問することは職務から外され、正直憤りもありました。でも、民生委員も被災者で、家を流され、仕事を無くした中での活動だから、震災の年は地区民児協としての組織的仕事はできませんでした。民生委員個々には

地域に残った人たちのことを気に掛け見回り活動をして頑張った方もありました。

翌年5月からは『みんなと行兵衛茶屋(いくべっちゃや)』という地域のコミュニティサロンを地区の福祉団体協議会や地縁団体と共に開設しました。あの時はみなさん行き場がなくて、集まった時は涙を流し抱き合いながら再会を喜んでいました。

<戸田>

包括に異動になって5ヶ月後の地震だったので、全てが手探りの状態でした。担当地区内は、津波で何もかも失った人と、津波は来たけど家は残った人という状態に分かれ、本当に忙しかったですね。目まぐるしいといえます。

<本庄>

震災当時は、福祉とは接点のない業界で仕事をしていて、ボランティアとして石巻に来ました。ボランティア団体に所属し、避難所や仮設住宅の支援をしながら、地域に必要な支援を考えていきました。



飲食業、水産業、観光業、主婦、無職…。前職も年齢も様々。そんな我らは、地域福祉の魅力に取りつかれ、もう一度学びの世界に飛び出したメンバーも。今ではたくさんの『社会福祉士』が誕生しています。



地域福祉コーディネーター配置当初の印象は？



<遠藤>

私はもともと社協が何をしているところなのか全く分からなくて、CSCが地域に入ってくるようになって、社協を知ることができました。あの時は動ける余裕がない状態だったから、CSCが情報をつないでくれたことで「自分たちでも何かできるかも」という感じでしたね。

<本庄>

僕自身も、社会福祉協議会とは何ぞや？というレベルだったので、CSCと言われても、チンプンカンプンでよく分かりませんでした。ただ、地域や会議でちょくちょく会うようになってからは、どんな活動をしているのか直接聞くことが増え、徐々に分かるようになっていきましたね。

<戸田>

当初は「この人たちと付き合い大丈夫なのかしら…」という想いがあり、理解が足りなかったところからのスタート

でした。当時は混乱していて、とにかく何もかもがバラバラだった。あの時は、民生委員も私たち専門職も被災者だった。ただでさえ自分のことも大変だし、仕事もしなければいけない。そんなところに新たな職種とか、新たなボランティアが来るとやはり混乱しちゃうんですよね。

<蟻坂>

今だから言えるけど、最初の頃はCSCと聞いて「何こいつら？」「何をやるんだ？」と思っていました。今思えば、新しいシステムができるみんな暗模索で不安なんだよね。見取り図があれば理解できるんだけど、CSCの説明がないからおそろしくしゃくした。それがそのまま進行しなければならぬ時期でもあったから仕方ないのかな。だんだんとCSCが浸透してきたが、やはり時間がかかったと思う。でもそれは必要な時間だったと思うよ。



<蟻坂>

CSCは地域にグイグイ入ってくるよね。だから地域にもものすごく存在が浸透している。町内会と民生委員と一緒に始めた見守り活動『オレンジの会』は役割を超えて取り組む小地域福祉活動の先駆けといってもいいよね。福祉活動は民生委員だけでやるという時代ではなくなってきているんだね。

<戸田>

「こんな忙しいところに1人包括職員が増えたわ！」「良かったわ！」みたいな気持ちで一緒に仕事をしてきました。今もずっとそうです。時には、CSCは包括職員、時には包括職員がCSCでもある。そんな感覚で共に仕事をしていますね。

地域福祉コーディネーターとの思い出エピソード

<遠藤>

震災後すぐ、保健師さんや包括さんに入ってもらって『まねきいきいき体操』というサロン活動を高齢者のために始めました。当時私たち自身はあまり動けなかったから、CSCが色々な人とつなぎ合わせをしてくれてすごく助かりました。今も町内会行事に参加してもらったり、川開き祭りの『孫兵衛船競漕』にも一緒に出たり、同じ町内の住民みみたいな感じでCSCを捉えています。

復興に向けてCSCと一緒にやってきたという感覚があります。今は生活全般で分からないことや、どうしても誰かの手を借りたいと思う時に相談に乗ってもらっています。何も無いところからの出発だったので、CSCの存在があったのはすごく助かりました。

もう3代目のCSCになりますが、ずっとお世話になっています。

<本庄>

どこにでもいるのがCSCって感じですね。いろんな場所で出会いますよ。半島部では、やっぱり各浜がてんでばらばらなわけで、CSCが各浜のことを『ねっばして(くつつけて)くれる』わけですよ。それがすごくありがたい。具体的には、

各浜でやっているサロン活動者が集まれる『サロン交流会』の企画や、浜を超えてのゴミ拾い活動も今は盛んにやっています。浜同士がつながることで、地域の力が高まった気がします。



地域福祉コーディネーターに今後期待すること

<本庄>

CSCを末永くやっていただきたいなと。やはり住民が一番近い専門職だと思うんですよ。CSCは個人支援も大事だけれど、地域全体を俯瞰し見てほしい。半島部は浜ごとに特徴があって、歴史やしがらみもありますね。だからこそ、浜ごとに合わせた関わりが求められる。一緒にたの支援は難しいので、そこを重視しながら、つながりづくりをしてもらえると嬉しいかなと思います。

<遠藤>

私たちは、CSCに全体を調整してもらい『ささえあいミーティング(地域主体の話し合いの場)』を定期的にやっています。ずっと地域の中で住民と専門職がチームとして存在しているという安心感がある。だから、CSCとは何でも話せる関係が大事だと思う。なかなか難しいと思うんだけどね。

<蟻坂>

10年経ってCSCの平均年齢もだいぶ上がったね。もっと若い子たちが地域に入ってくると地域も活性化し、活動の幅が広がると思うんだよね。行動力ってやはり大事。さらに個々の力量も必要だね。CSCに求めたいのは『意を汲むという力』。ちゃんと住民が言っていることを理解してくれる力を求めたい。そのためには地域の特性を知っておかないとなかなか難しいよね。何でも話せる関係は、その上でできてるのかなと。それから『掘り起こす力』。PTAもそうなんだけど、地域って人材の宝庫なんだよね。それを掘り起こして活用してほしい。なかなか掘り起こしは私たちだけではできないんだよね。世代もあるし、住民だからこそその遠慮もある。あとは『発信力』。CSCが目指していることや、できることを大いに発信してほしい。

<戸田>

つながってすごく難しい。住民の困りごとをCSCがキャッチして、包括につないで後どのように解決していくかが重要。

だからそういう意味では『ねっばす』っていう力も大事。あとは何を考えているのか、やっぱり話し合うことが大切だと思っています。今は、何事もCSCに伝えて一緒に考え、行政まで伝えていくということまでできるようになってきたなと感じる。そこに住民が交わり、ひとつの地域力になっていくと思っている。これこそが地域包括ケアシステムの基盤だなと。

<遠藤>

それこそ今地域包括ケアシステムを築いていかなければいけないという時に、CSCの存在は大きいんじゃないかなと。震災があって余計にそう考えさせられた。私たちの立場からすると、どう一緒にやっていくかっていう意識がないとダメだなと。任せきりになると社会保障みたいになっちゃう。制度があるから、隣近所仲良くしなくたっていいんだみたいな。隣近所支え合い・助け合いが基本じゃないかとやはり思うんだよね。例えば1人で逃げられない人の避難をどうやって手伝うかっていったら、あれは、『義』より『情』だと思うんだよね。昔、うちの子もたちが隣のおばさんにお世話になったとか。それで情が通って一緒に逃げましょうという関係性が生まれる。そんな『情づくり』をCSCは地域に入り一緒に担ってきてくれた。住民だけの限界もあるから。

<蟻坂>

CSCが配置されて、社協が地域に出るようになり、機能も拡大してきたなと実感している。福祉って今すごく膨れているんだよね。生活福祉資金や介護保険、多様な生活課題、地域ごとの課題も様々。だからこそ、CSCの存在が求められているんだと思う。地域が力を発揮するために欠かせない存在になりつつあると感じている。CSCの存在っていうのは、決して震災由来だけでなく、福祉課題が複雑化・多様化する現在に求められる、つなぎ役の一つかと思う。



普段は悩みを聞くのが仕事ですが、いつの間にか『人生相談』に乗ってもらっていることも。親身になって話を聞いてもらおうと救われた気持ちになるんだと、逆の立場になって教えてもらいました。



フェーズ1

仮設住宅支援期

平成25年度～平成26年度

住まいの 再建状況

- 被災前とは異なる地区での仮設住宅、みなし仮設住宅に入居し2年が経過した
- 復興公営住宅(借り上げ型)が完成し、入居が開始された
- 防災集団移転地、復興公営住宅への事前登録が開始された

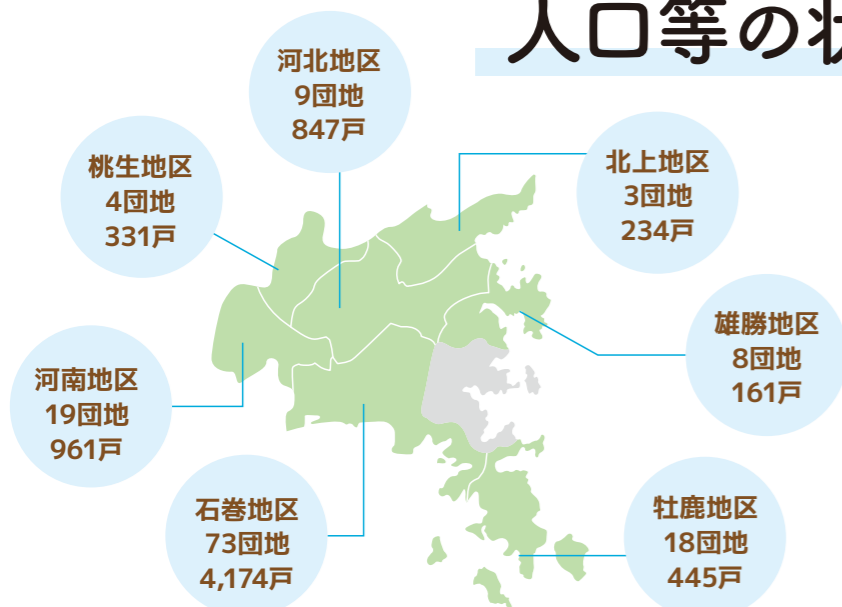
コミュニティ 状況

- 仮設住宅独自の自治会設立や、既存町内会への編入など、団地の環境、状況に合わせた自治組織が形成されていた
- 仮設住宅団地会等による、コミュニティ活動が活発に行なわれていた
- 騒音、駐車場、ゴミ、集会所の使い方等、仮設住宅内だけでなく周辺地域との生活トラブルが増加し始めた

支援の状況

- 炊き出し、物資配布、慰問、傾聴等、ボランティア団体の支援が継続的に実施されていた
- 地域生活支援員の訪問活動、多職種でのエリアミーティング、NPOを対象とした仮設住宅支援連絡会等が定着してきた

人口等の状況



プレハブ仮設住宅写真

各地区のプレハブ仮設住宅総整備戸数

年度	人口	世帯数	プレハブ仮設住宅		みなし仮設住宅		復興公営住宅 整備完了戸数
			入居戸数	入居人数	入居戸数	入居人数	
平成25年度	150,303	59,517	6,377	14,444	4,407	11,489	149
平成26年度	149,248	59,952	5,681	12,221	3,824	9,847	929

※各年度3月末時点(石巻市保健福祉部生活再建支援室より)

地域生活課題

住民の声

●孤立・孤独・さみしさを抱える 住民の増加

近隣とのつながりが薄いなど、他者に頼りづらい環境にあり悩みを抱え込む傾向にあった。自死や死後長期間発見されないケースがあった。そのことが、近隣住民の心身へ与える影響も大きかった。

あのと、声をかけておけばよかった。そのことを考えると眠れないのよ。

大きい仮設にはばかり支援が入ってるよね。

●仮設住宅支援の偏り

世帯数の多い大規模仮設住宅に支援が集中する傾向があり、団地ごとの受援力、自立度によって外部からの支援に格差があった。一方で、みなし仮設住宅は市内に点在しており、支援対象世帯として見えにくい状況にあった。

みなし仮設には誰も来てくれない。どうしたら支援してもらえるの？



お醤油、貸してほしいって何度も家に来る人がいるんだけど、困るな～。お金ないのかしら…。

子どもに声をかける不審者がいる。怖いよね。

●潜在していた個別課題の顕在化

被災前の地区では、課題を抱えながらも周囲の理解・包摂の中で暮らせていた世帯が、環境やコミュニティの変化により、『困った人』として問題視されるケースが多く見られた。

妻を亡くし、子どもの入園手続きなどどうしたらいいのか。仕事には行かないといけないし、頼れる人はいないし、余裕がない。



●生活課題を抱えた世帯の増加

被災をきっかけにそれまで安定していた生活環境(住居、仕事、家族)が変化し、生活困窮、アルコール依存症、認知症等の多様な課題や、将来への不安を抱えた世帯が多く見られた。

朝早く仕事に行く人のエンジン音がうるさい。

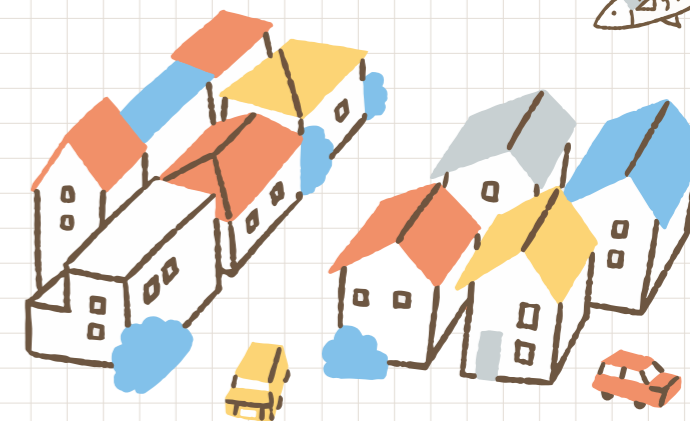


軒先に魚干さないでほしい。洗濯物が…。



●仮設住宅内でのトラブル

震災前の暮らし方が違うことで、騒音やゴミの出し方、車の止め方などのトラブルが起こった。生活再建の状況も様々で、あせりや先の見通しがたたないことへの不安やストレスが人間関係を悪化させた。



住民さんとの会話が盛り上がりすぎて、訪問した用件を忘れて帰ってくることも。事務所に戻って「あっ!」と思い出すコーディネーター続出。



主な取り組み



仮設住宅を中心とした支援

- 仮設住宅入居者個別ケースへの支援
(アルコール問題、ゴミ屋敷、精神疾患、今後の生活の不安、居場所づくり)
- 民生委員・児童委員、仮設住宅団地会役員等との関係づくり
(定例会議への参加、同行訪問、ヒアリングの実施、意見交換会の実施)
- 復興公営住宅、防災集団移転地に対する調査
(借り上げ型復興公営住宅入居者ヒアリング、移転予定地現地確認)
- 既存町内会等を含めた地域活動の側面支援
(助成金申請、チラシ作成、ボランティア調整、サロン立ち上げ、住民交流会実施)



多職種連携による支援体制の構築

- 仮設住宅エリアミーティング等を通じた関係者とのつながり構築、協働
(健康相談会やサロン等の定期的なイベントの開催、ケース会議への参加)
- 仮設住宅エリア主任、地域生活支援員との連携
(同行訪問、定期的な情報共有の場、ケース検討、団地診断)



CSCとしての資質向上

- 専門知識取得のための研修参加
(被災者支援従事者研修、地域福祉コーディネーター基礎研修、アルコール関連問題支援者研修)
- 仮設住宅団地の社会資源の把握、分析とまとめ
(世帯構成や特技を持つ住民情報の整理、住民間のつながりの可視化)
- 定期的な内部ミーティング、地域福祉アドバイザーによる助言・指導
(ケース対応の検討、アプローチ方法の検討、役割の整理)

事例

仮設住宅でも楽しく暮らしたい。『つなぐ』で課題の解決をめざす

きっかけ

仮設住宅団地会や既存町内会の役員への聞き取りを行った。団地会役員からは「小規模の仮設では交流を目的とした支援を受けにくい」町内会役員からは「仮設住宅の方たちのことが心配」との声が聞かれた

地域情報

内陸部にある住宅地(約1,500世帯)に、5つの仮設住宅(計140戸)が建設された。町内の集会所では、月1回老人クラブの活動が行われている。大規模仮設住宅に支援が集中する傾向があり、外部からの仮設住宅団地への支援に格差が生まれていた

取り組み(課題と効果)

- 5つの仮設住宅団地の役員が集まって自由に話ができる機会をつつた
→ 同じ仮設住宅でもそれぞれ状況が違い過ぎて話がかみ合わなかった。『役員構成』『集会所での活動』など模造紙に書き出すことで、相手の状況を理解した発言ができるようになった
- 「楽しみ=ボランティアの支援だけじゃない。自分達で楽しみをつくっては？」と提案するタイミングに悩んだ
→ 話し合いの中で「次は、話すだけでなくおにぎりや豚汁をつくろう」と自発的な意見がでるようになり、ひとつひとつ取り組んでいった結果、継続した取り組み(クラフト折り紙づくり)が始まった
- 地域で行われている老人クラブ活動に参加し、仮設住宅への訪問を提案した
→ 「仮設住宅と地域のつながりをつくりたい」という自身の考えを一方的に押し付けてしまい、賛同が得られなかった。その後、クラフト折り紙がきっかけとなり、老人クラブ活動へ参加するようになった



振り返り、気づき

住民同士、専門職それぞれの思い込みや憶測などが、取り組みの進展に影響することがある。現状や関心事、特技など丁寧に聞き取り、顔を合わせ理解し合う機会をつくっていくことが重要だと気づくことができた

仮設住宅班長の声

仮の生活の場である仮設住宅ですが、楽しみがほしいと思えました。ボランティアさんや地域の方々とのつながりができた忘れられない時間です

事例

地域特性を活かしたネットワークづくり

きっかけ

被災者支援の一環として仮設住宅で実施していた健康相談会は、就労世代の男性の参加率が極めて低く、牡蠣剥き作業の最盛期には参加を促すことがより困難だった。「CSCって何してくれる人?」といった地域や専門職からの声や空気感を感じていた。地区特性を踏まえた健康相談会の企画・実施が役割の周知につながると考えた

地域情報

震災の影響により人口は減少傾向。住民の多くが牡蠣養殖に従事しており、各浜に牡蠣剥き場がある

取り組み(課題と効果)

- 漁協へ経緯と必要性を説明し、出張健康相談会実現の可能性を探った
→ 地区特性のひとつである、生業を重要なポイントとして捉えた。漁協へ働きかけたことで、地区のキーパーソン(区長、民生委員・児童委員、漁協支部長)とのつながりを持つことができた
- 地区のキーパーソンを訪問し、牡蠣剥き場での健康相談会実施に向け協力を依頼
→ 「何しさ来たの?」「そんなのやる意味あるの?」といった声に役割として返答できず、地域と関わる事に不安を感じた。まずは牡蠣剥き場に何度も足を運び、世間話の中から地域の暮らしを知ることを意識した
- エリアミーティングで出張健康相談会の企画・実施を提案
→ それぞれの専門職ができることを出し合い、互いの役割について理解を深めた。実施に至るまでの過程で生まれる一体感を大事にした

振り返り、気づき

相手の懐に入り対話の中で住民ニーズを把握していくことや、専門機関が住民に対して伝えたいことを、生活様式に合った形に調整していくことが、地域にとって一番効果があったと感じる

保健師の声

専門職間で役割の理解が深まり連携強化が進みました。区長、民生委員・児童委員、漁協など地域の方々、顔が見える関係性を築けたことが一番の成果だと思います



地域で飛び交う方言。県外出身で言葉が分からずにいると、住民さんが即席の方言講座を開催してくれます。修行を重ね、最近ようやく「随分うまくなったね」と言われるようになりました。

アルコール依存症を抱えるSさんの暮らしを地域と共に考える

きっかけ

仮設住宅団地会の班長より、「何度も救急車を呼ぶ人がいる」「朝から毎日お酒を飲んでいるようだ」との情報が寄せられた

地域情報

商業用地に仮設住宅団地が多数建設されたエリア。周辺には、既存住宅(約50世帯)が点在している



本人状況

Sさん 63歳 男性
 ・自宅は全壊流失。喪失感からアルコール依存症になり失業、離婚
 ・アルコール依存症の入院治療(7ヶ月間)後、A仮設住宅団地(約40世帯)に入居

取り組み(課題と効果)

- 保健師と同行訪問し、Sさんの生活状況を確認。課題ではなく、好きなことや楽しみにも着目したアセスメントを行った。またSさんの周辺環境を理解するため、団地会状況、既存地域の資源(集いの場など足を運べる場等)の調査を始めた
 →これまでの暮らし方に支援のヒントがあると考え、多面的に探った。だが他の専門職には、課題解決に直結するアプローチには見えにくく、支援のズレを感じた
- ケース会議において『地域を基盤とした支援の提案』を行い、支援方針の共通認識を図った。課題解決ではなくSさんがやりたいことを応援する会議とした
 →Sさんは、「話すことが好きでテレビと話している」「仕事に誇りをもっていたんだ」と熱く語られた。課題ではなく、本人の想いを中心とした支援の在り方を多職種で考える時間となり、地域に対する関心も高まった
- 既存地域にあるお寺を訪問し、住職に仮設住宅団地の現状を伝え、社会参加のニーズがあることを共有した
 →既存地域は、被災度の違いから申し訳ない気持ちを抱えており、仮設住宅団地への関わりを遠慮していた。その間をコーディネートする役割が必要だった。「落ち葉拾いを手伝ってもらえないか」と役割創出を考え、提案してくださった。Sさんがきっかけとなり、支える力がつながり始めた
- 団地会の班長や近隣の気にかけてくれる方と懇談し、見守る大変さと支えたい想いに寄り添った
 →「助けてほしい」という気持ちに付随する大変さを吐き出してもらうことで、『支える側』を支えることができた
- 一緒に団地のお茶会やお寺に足を運び、Sさんが望む誰かとつながれる場を増やした
 →住民間の見守りが自然と生まれ、声掛けだけでなくご飯の差し入れや、Sさんが好きなよさこい踊りなどを盛り込んだお茶会が見られるようになった
- お茶会で、Sさんが周囲に想いを伝えられるような投げかけを行い、住民同士が語り合う時間を意図的に設けた
 →「Sさんに市報配布をお願いしたいと思っていた」との声が上がった。「それぐらいならやるよ」と引き受け、周囲のために動き始めた。実際は、飲みすぎて配布できない日も多く、周囲がサポートしてくれた。また、アルコール依存症の方への接し方や抗酒剤について学ぼうと団地会が動き出し、看護師や薬剤師による勉強会が開かれるようになり、専門職が地域の中で力を発揮する場が生まれた

振り返り、気づき

- そこに暮らす生活者という視点で、地域アセスメントをしていくことの重要性を実感した
- 専門職がチームとなり、本人や地域を支える基盤づくりを意識した。そのためには、話し合いを重ねることや、現場と一緒にいくことが大切だと感じた
- 地域側の「何とかして」という訴えに苦しくなったことも。支える側も苦しんでいることを知り、何よりその気持ちに寄り添うことが求められていると気づいた。間接的支援はそのひとつひとつのプロセスに丁寧に関わることが必要であり、時間はかかるが、地域の力が少しずつ変化していくことを実感した

看護師の声

たくさんの方が関わるうちに、アルコール課題を抱えるSさんではなく、誰かのために頑張るSさんに変化していった。課題が改善された訳ではないが、地域の支える力が、暮らしの中で『Sさんらしさ』を引き出してくれた成果だと思っています



支援・活動の振り返り

●「本人が望む暮らし」の視点を持つ

大切にしたこと 被災という共通課題から、時間を経るごとに、生活力の違いや個々の事情で、課題が細分化してきたため、より個に向き合う必要が出てきた。個々の生活再建のスピードに合わせることを大切にしました。

難しかったこと 周りの人たちと比べて、自身が思うような再建が進んでいない状況に焦りを感じている。そのような人からの「なんとかしてほしい」という言葉に、「どこまでできるのか、自分に受け止められるのか、この役割で何ができるのか」と自分だけで解決しなければならないと悩んでいた。

●今までの暮らしや今ある暮らしを大切にする

大切にしたこと 入居から退去までの間の支援を仮設住宅支援と捉えてしまっていたが、本人の暮らしは途切れず、つながっているということに気づかされた。今までの暮らしぶりから本人の経験や特技を知ることが大切にした。

難しかったこと 被災による喪失感などを抱えている中で、どこまで踏み込んでよいのか迷った。自分たちが関わることで、つらい体験を思い出させてしまったり、震災前の暮らしと比較させてしまったりすることもあった。

●多様な専門職との接点を持つ

大切にしたこと 自分たちでは解決できないことが多く、多様な専門職と連携して取り組む必要性を感じていた。『地域福祉の調整役』の必要性を自分たちの言葉で伝えることや、一緒に地域に出る機会をつくることを大切にしました。

難しかったこと 「CSCとは何者なのか、何ができるのか」を明確に言語化することが難しかった。専門職だけで課題を解決することにとらわれ、地域の関わりの中で解決する視点の大切さを伝えることが難しかった。

関係機関の声



高橋 由美さん
 石巻市健康部健康推進課
 技術課長補佐(当時)

当初の仮設住宅入居者の健康支援では、孤独死や自死の予防、心のケアやコミュニティ形成が求められていましたが、行政の保健師だけでは限界がありました。しかし、CSCの配置で、多職種連携による被災者支援が効果的に進みました。各地区でのエリアミーティング開催では、担当保健師や関係支援団体等と情報や課題を共有し連携した関わりができました。特にCSCは人をつなぎ、関係機関と相談しながら団地内でのお茶のみサロン等の立ち上げや地域を巻き込むアプローチに定評がありました。

配置当初はCSCの役割について、他職種から疑問視する声もありましたが、熱意と誠意ある行動で、住民や他職種との信頼関係を築き、役割を確立し頼られる存在となっていました。



CSCには、よく使う7つ道具があります。①付箋 ②地図 ③ホワイトボード ④模造紙 ⑤靴下 ⑥軍手 ⑦カメラ これらを駆使し、住民さんと地域の未来を描きます!!

フェーズ2

復興公営住宅支援期

平成27年度～平成29年度

住まいの 再建状況

- 復興公営住宅の建設が進み、96%の整備が完了した
- 同時に、仮設住宅からの転居が進み、空室が目立ち始めた
- 仮設住宅の撤去・解体に伴い、仮設住宅間の集約が行われた
- 新市街地、防災集団移転地の整備完了後、自宅再建が進んだ

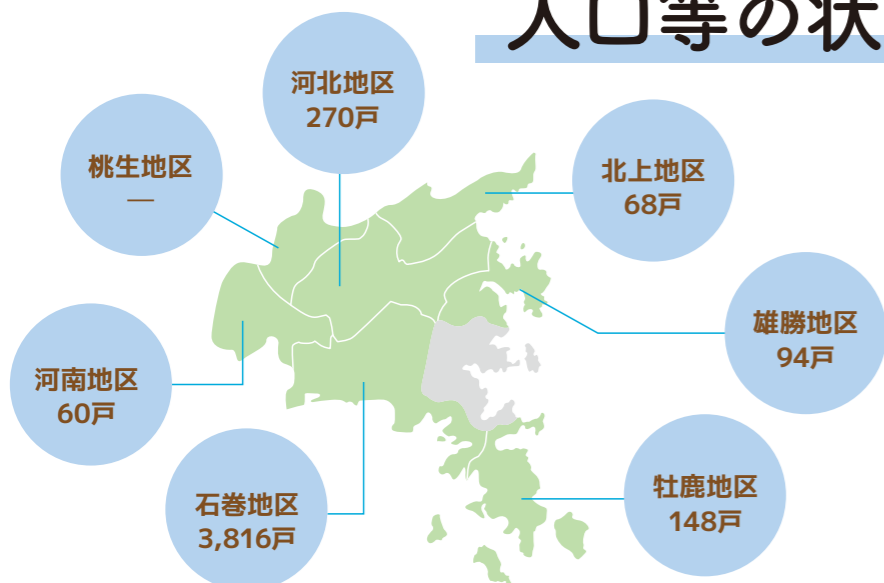
コミュニティ 状況

- 仮設住宅入居者の減少により、自治機能やコミュニティ活動の維持が困難になった
- 復興公営住宅での団地会設立、既存町内会等への編入、新たな町内会の立ち上げが行われた。各地区の状況に沿ったコミュニティの再構築が進められた
- 仮設住宅で中心的な役割を担った住民が、主体的にコミュニティ形成を進めようとする姿が見られた

支援の状況

- ボランティア団体、NPOの支援が仮設住宅から復興公営住宅中心へと移行した
- エリアミーティングの場を活用し、転居によって支援が途切れないようにする引継ぎや、生活再建に向けた伴走支援を多職種で取り組んだ

人口等の状況



復興公営住宅写真

復興公営住宅総整備戸数(参照:令和6年1月 石巻市『東日本大震災からの復興』)

年度	人口	世帯数	プレハブ仮設住宅		みなし仮設住宅		復興公営住宅 整備完了戸数
			入居戸数	入居人数	入居戸数	入居人数	
平成27年度	148,238	60,643	3,951	3,202	2,667	6,181	2,438
平成28年度	146,991	61,006	2,138	4,817	1,839	4,237	3,673
平成29年度	145,386	61,236	846	5,301	1,180	2,659	4,269

※各年度3月末時点(石巻市保健福祉部生活再建支援室より)

地域生活課題



住民の声

●次なる住まいへの歩みに顕著な差

復興公営住宅への転居が進む中、世帯の変化や区画再編状況など、様々な要因により、再建の見直しを必要とする世帯が増加。寂しさや焦り、取り残され感など、心身へ与える影響も大きかった。

元気なうちに住んでた地区に戻れるのか。行き先を変えた方がいいのか判断に迷う。



情報が入って来ない。誰が教えてくれるの？

●仮設住宅団地会の自治機能の低下

団地会で取り組んでいた市報配布や回覧板、ゴミ集積所の整理や、それらを話し合うための役員会等ができなくなった。給湯器等の窃盗が相次ぎ、防犯面での不安の声が多くあがった。



復興住宅がなかなか当たらない。なんで俺だけ…。

お湯の溜め方が分からず、お風呂に入れていない。

みんないなくなって、静かすぎて不安。

●新たな住まいの場での混乱

復興公営住宅の入居者は高齢者が多く、最新の設備(緊急コールボタン・給湯器等)に適應するまで時間を要した。住民同士のつながりが薄いため些細な困りごとであっても、解決することができない状態であった。

仮設の時は隣の〇〇さんが助けてくれたのに…。

集会所ってみんなの物でしょ？特定の人だけ使ってるのに、そこに共益費が使われるの？



もともと住んでいたのに、高台に住んだらよそ者みたいに扱われちゃってさ…。

●復興公営住宅内のコミュニティ構築

仮設住宅団地では、集会所の管理費は公費で賄われていたため、コミュニティ活動がしやすかったが、復興公営住宅は共益費の中から集会所の維持管理を行うため、運営に関して住民間の合意が必要であり、活動を推進していくことに時間を要した。

この地域の仲間として一緒にやっていきたいけど、声を掛けても誰も来ないんだよね…。

●復興公営住宅と既存町内会の融和

内陸部では、新たな住民を受け入れようとする町内会も多く、共に地域づくりを進めようとする気運は高まっていたが、町内会に加入しない世帯も多く、足並みが揃わない状態が続いた。沿岸部では、被災程度や生活再建状況の違いが心情的に作用し、同じコミュニティ内であっても住民間に隔たりが生まれる様子が見られた。



私は、CSCの愛車モコ!暑い日も寒い日も大雨の日もいつも一緒。今日もお出かけ、わーい。あれれ、またこの道?さっき通ったよ。やっと着いた!けどここ隣の家の庭じゃない?大丈夫?



主な取り組み

仮設住宅に残る世帯の情報を改めて整理しながら、支援が途切れないようにしないと。

家賃の支払いが始まり、家計の見直しが必要な世帯が増えるかも。支援制度についても勉強しないと。

仮設住宅や復興公営住宅など住まいの形にとられない、普遍的な課題にも対応していく必要があるんじゃないか。

集会所の使い方でも住民の意見は様々。思い思いの意見を言い合えるようなきっかけが作れたら…。

仮設住宅や復興公営住宅など住まいの形にとられない、普遍的な課題にも対応していく必要があるんじゃないか。

お店や学校など多様な地域資源とのつながりをもっと作っていかないと。

復興公営住宅ができたことで、近隣住民同士がもっと顔を合わせる機会が増えればいいな。

復興公営住宅を中心とした支援

- 復興公営住宅入居者個別ケースへの支援 (認知症、男性の孤立、生活困窮、騒音・ペットトラブル、複合的生活課題)
- 暮らしの定着に向けた企画の実施、活動支援 (まち歩き会、桜の植樹会、既存町内会との交流会、津波避難ビル見学)
- 地域活動の活性化を目指した側面支援 (サロン交流会、福祉協力員見守り活動、高校生のボランティアグループ、子ども食堂、自宅開放型・訪問型サロン、福祉協力店設置)



多職種連携による支援体制の構築

- エリアミーティング等を通じた関係者との連携強化 (仮設住宅、復興公営住宅入居者個別ケースの支援方針検討、地区特性の整理)
- 仮設住宅から次の暮らしへつなぐ支援 (世帯情報の一元化、引越し困難世帯への支援、高台移転による生活課題への対応検討、団地会お別れ会、復興公営住宅見学会)
- 地域課題の解決に向けた取り組み (サロン活動立ち上げ支援、サロン団体紹介シート作成、男の介護教室、地域の支え合いを考える大会、福祉協力員・民生委員児童委員合同研修会)



CSCとしての資質向上

- 地域資源や制度の把握、可視化(地区情報シート、地域資源マップ、生活困窮者自立支援制度勉強会)
- チーム制による共通課題の支援策検討(離半島部チーム、支所担当者チーム、活動記録検討チーム)
- CSC活動の可視化、啓発、プレゼンテーションスキルの強化 (活動記録フォーマット作成、活動報告会実施、シンポジウム等への参加、視察対応)

事例

転居してくる人、受け入れる人、双方の想いをつなぐアプローチ

きっかけ

復興公営住宅建設予定地となる住民の「何千人という人たちが移り住んでくる。どんな人たちが来るか不安」でも仲良きはしていきたい」といった複雑な気持ちを受け止めた

地域情報

旧来からある農村地区と昭和時代に宅地開発により住民が増えた地区、震災後防災集団移転により開発された地区がある。被災した沿岸部からの転入により、市内で最も人口が増加した地区である

取り組み(課題と効果)

- 転居に不安を抱えた住民を支援するCSCと既存町内会が話す機会を設定。受け入れ側の想いを把握したうえで、転居を控えた住民の気持ちを代弁した
- 双方をつなぐことで受け入れ側の理解が進み、地域のことを知ってほしいという声を引き出した ※p.19事例『個別支援と並行した次なるフェーズへの支援』参照
- 『くらしのマップ』づくりを提案し、作成に向けてまち歩きを実施
- 地域の歴史や行事、愛着のある場所などを確認し合うことができた。「神社のお祭りが新旧住民の交流の場になるかもね」といった声が上がリ、交流の場づくりの気運が高まった
- 住民交流会の実現に向け、準備の協力をした。招待状の作成や当日の席の配置など、転入してくる住民が参加しやすいような工夫を提案
- 直接顔を合わせたことで、双方にとってこれからの生活を思い描く時間となった。その後『くらしのマップ』を見て、サロン活動に転入者が参加する姿が見受けられた



振り返り、気づき

受け入れ準備を整えることをきっかけに、住民自身が改めて地域と向き合う時間となるようサポートした。住民が持つ地域への愛着が『暮らしやすさ』を形成していることに気づいた

町内会長の声

自分の地域の魅力を改めて知ることができました。顔を合わせて話すことで想いが伝わり、互いにあいさつし合う関係づくりの一助となり感謝しています

事例

地域の支え手の孤立を防ぐ

きっかけ

新任の民生委員・児童委員Aさんより「新しく越して来た人が多いこの地区で、民生委員とサロンの代表、両方上手くやっていけるか不安」との声が寄せられた

地域情報

市内内陸部に位置し、津波被害がなかった地区。震災後に宅地開発が進み、世帯数が震災前の約50世帯から約100世帯へと増加した

取り組み(課題と効果)

- Aさんの「新しく越して来た人たちもサロンに誘いたいけど、関わるきっかけもないし…」との声に対し、一緒に訪問することを提案するも決めかねていた。Aさんの悩みを町内会長に代弁し、協力を得られるよう働きかけた
- 町内会長が同行してくれることとなり、Aさんの決断の後押しができた。訪問によって、震災の影響で転居してきた人が多いこと、認知症の人がいる世帯があること、ものづくりの特技を持った人がいることなどを共有する機会となった
- Aさんと町内会長が、日常的に地域情報を共有できるような関係となるよう、振り返りの場を設けた。話し合いの推進役として前任の民生委員・児童委員に声をかけ、支え手が一人で抱え込まない体制づくりを目指した
- 「子どもの遊び場がない」「近隣とのつながりがない」といった地域の課題を共有したことをきっかけに、町内会の夏祭りに子どもが楽しめる催しを多く取り入れるなど、できること、やりたいことを共に考える関係性につながった



振り返り、気づき

支え手の不安や悩みに寄り添いながら、地域の中で仲間を見つめられるよう支援することで孤立を防ぐことを目指した。身近すぎて住民が気づけていない地域資源を発見し、その価値を認識できるような関わりを意識した

民生委員・児童委員の声

身近に協力してくれる人がいると、安心して活動できます。地域に出ることに前向きな気持ちを持てるようになりました



休みの日にバツリ担当地区の住民さんに出会うこともしばしば。こちらに気づき、大きな声で呼びかけられることに、ちょっぴり恥ずかしくもあり、嬉しくもあります。

個別支援と並行した次なるフェーズへの支援

きっかけ

復興公営住宅への入居が近づくにつれ、「仮設住宅にずっといたい」とひきこもりがちになったNさんを心配した近隣住民より相談を受けた

地域情報

S仮設住宅(約20世帯)は、津波被害のなかった住宅地内の公園に建設された。抽選方式による入居のため、当初は近隣同士のつながりが薄かったが、お茶会などを開き関係性を深めてきた

本人状況

Nさん 80歳 男性 独居 ADL自立
 ・趣味は自転車での散歩 ・平成23年9月仮設住宅に入居 ・平成27年10月復興公営住宅への転居が決定

取り組み(課題と効果)

●近隣住民とNさんを訪問し、転居の不安に耳を傾けた。集会所でのお茶会に誘ってみたが「寂しいのは自分だけだから今は行きたくない」と断られた
 →寂しいのなら集いの場に参加してはどうか、という一方的な想いが強かったことを反省した。自宅への訪問を重ね、じっくり話を聞くことにした

●Nさんと同じ境遇の方に、転居に伴う気持ちや今後の生活についてヒアリングをした
 →「暮らしイメージが湧かないから不安。やり直した」と話す方がおり、Nさんと共通する思いを把握できた一方で、「これからは、自分たちで何とかしていかないとね」という前向きな声も聞かれた。仮設住宅での経験を通じて培われた『自助力』が移行期支援のポイントになるのではないかと考えた

●エリアミーティングにおいて、転居に伴う生活課題や不安を抱える住民の実態を取り上げ、より個々に寄り添う支援が求められていることを共有。それぞれの専門職が持つ情報に統一性がなかったことから、まずは移転先、関わり状況など、全世帯(約2,000世帯)の情報一元化に取り組んだ
 →支援の必要性の高い世帯を抽出し、医師や看護師など多職種が協働してアウトリーチを進めた

●お茶会の場で、仮設住宅団地コミュニティの取り組みとそれに伴う気持ちの変化を書き出す『年表づくり』を実施
 →近隣住民が誘い続けたことでNさんも参加し、仮設住宅での暮らしを振り返る時間となった。「やっぱり転居先を見てみたい」「同じ場所に行く人はいないかな」とのNさんのつぶやきから共感が生まれ、Nさんの引越越し応援隊が結成された

●転居先担当のCSC、町内会と話す機会を設け、受け入れ側の想いを把握したうえで、転居を控えた住民の気持ちを代弁した
 →双方の想いがつながったことで理解が進み、転居先の町内会より行事の招待状がNさんに届けられた
 ※p.18事例『転居してくる人、受け入れる人、双方の想いをつなぐアプローチ』参照

●Nさんの引越越し応援隊とともに、同じ復興公営住宅に行く人がつながる機会としてお茶会を開催した。また転居前に町内会行事に参加できるようCSC間で連携し調整を図った
 →Nさんは、お茶会の場でKさんと仲良くなり、町内会主催の花見会に参加した。自ら踏み出した一歩で、転居前につながりを作り不安が軽減された



振り返り、気づき

●移転に伴って寄せられた様々なニーズに、特定の機関だけで対応していくことは困難であったため、多職種によるチームアプローチの必要性を感じた。住民の声を多職種の協議の場で伝え続けることで、相談支援を分野や役割を超えて包括的に提供できるよう努めた

●現在の暮らし(仮設住宅)からこれからの暮らし(復興公営住宅)へと、生活圏が定まらない時期であった。同じ役割を持ったCSCが地区を超えて連携したことで、切れ目のない支援を行うことができた

Nさんの声

引越した後、町内会が作ってくれた地図を持ち自転車で散歩に行くのが日課でした。もう自転車には乗れないけれど、近所の方が声を掛けてくれるから、なんとか暮らせています。みんなに感謝しここで長生きしたいです



支援・活動の振り返り

●本人の望む暮らしに寄り添い、動く

大切にしたこと 公的機関から再建計画が提示される中で、再建が進まない住民の苦悩に寄り添いながら、住民自身が想いを言語化することや、考えを整理できる時間を大切にしました。

難しかったこと 長期間の仮設住宅での生活が日常になっていたため、住民の望む暮らしの形もバラバラで、すべてを受け止めきれなかった。再建計画を意識しつつ、本人に対する声掛けや言葉選び、代弁機能を果たすことが難しかった。

●個別課題を地域課題として普遍化する視点を持ち、地域へ働きかける

大切にしたこと 「復興公営住宅だから起きていることなのか、地域にも同じ課題があるんじゃないか」「同じような想いや考えを持つ人が地域にもいるんじゃないか」という考えを常に持ちながら、事象に携わっていた。

難しかったこと 地域の状況や雰囲気、キーパーソンの人柄や想いを把握しないまま課題解決を目指したため、共感が得られず、誤解や負担感を地域に与えてしまうこともあった。

●多様な地域資源と福祉との接点をつくる

大切にしたこと 企業・NPO・学校・施設等の取り組みに関心をもち、相手の理念や意向に沿った提案をすることで、福祉的な活動を共に生み出していくことを大切にしました。

難しかったこと 今まで福祉分野に関わりがなかった資源を開拓することが難しかった。気軽に話せる関係性を構築できても、役割の理解や新たな取り組みを生むまでに時間を要した。

関係機関の声



高橋 仁志さん
 石巻市福祉部
 生活再建支援課 主査(当時)

今では、全国で地域福祉コーディネーターが地域福祉の分野で活躍していますが、間違いなくその存在、活動を広めたのは、石巻市社協CSCの取り組みだったと私は思っています。

CSCは『地域住民のサポート役』『行政と住民のつなぎ役』など、調べると格好よく説明されていますが、当時はそれとは程遠い、手続きが苦手な方の対応や仮設住宅から退去できない方、ゴミ屋敷等々ここには書けないようなことも含め、一緒に再建に向け支援を行ってきたなあと思います。

CSCは、地域福祉には必要不可欠な存在となっています。引き続き、地域の課題解決に向け、経験を活かしながら活躍されることを願っています。



ある日突然、写真とメモを渡される…。自身のCSCには地域の方から「この人どうだべ?」と、お見合い話が舞い込んでくることも。私たちの人生まで気にかけてくれるあたたかい仲間さんが地域にはたくさんいます。

フェーズ3

地域生活支援期

平成30年度～令和4年度

住まいの 再建状況

- 復興公営住宅の整備が完了した
- 仮設住宅全入居者の退去が完了した
- 土地区画整理事業等が完了し、戸建て住宅、賃貸住宅等の建設が進んだ

コミュニティ 状況

- 復興公営住宅団地会等によるコミュニティ活動、環境の維持管理活動が定着してきた
一部地域では、復興公営住宅が既存地域のコミュニティ活動の受け皿になったところもあった
- 時間の経過と共に世帯状況の変化(離別、死亡、収入増)や若い世代の転居、一般公募による入居が開始され、積み上げてきた関係性に変化が生じた
- コロナ禍以降、感染への不安が高まり、コミュニティ活動が休止、停滞する状況が続いた

支援の状況

- 被災者支援、復興支援の役割を終え、撤退、解散するボランティア団体、NPOが増えた一方で、地域を基盤とする支援団体は連携強化を目的としたネットワーク構築を進めていった
- 被災者支援から平時の暮らしの支援へ、多職種連携の在り方が変わった

人口等の状況

各地区の 人口、高齢化率 震災前との比較

河北地区		
	平成22年度	令和4年度
人口(人)	12,001	9,777
高齢化率(%)	30.3%	41.1%

桃生地区		
	平成22年度	令和4年度
人口(人)	7,867	6,623
高齢化率(%)	29.2%	39.6%

河南地区		
	平成22年度	令和4年度
人口(人)	17,312	18,582
高齢化率(%)	28.0%	34.2%

石巻地区		
	平成22年度	令和4年度
人口(人)	113,180	96,916
高齢化率(%)	24.9%	32.6%

石巻市全体		
	平成22年度	令和4年度
人口(人)	163,216	137,305
世帯数(戸)	60,818	62,259
高齢化率(%)	26.7%	34.5%

北上地区		
	平成22年度	令和4年度
人口(人)	3,913	2,150
高齢化率(%)	29.6%	46.0%

雄勝地区		
	平成22年度	令和4年度
人口(人)	4,366	1,079
高齢化率(%)	39.2%	58.7%

牡鹿地区		
	平成22年度	令和4年度
人口(人)	4,577	2,178
高齢化率(%)	40.0%	52.7%

参照：石巻市『住民基本台帳による男女別人口及び世帯数の推移』、『石巻市の高齢化率について』
人口、世帯数は各年度9月末、高齢化率は各年度3月末の数字となります

地域生活課題

住民の声

●復興公営住宅内外の コミュニティ形成、自治機能に格差

外部団体による復興支援活動が減少する中で、主体的にコミュニティ活動に取り組む団地と、まとめ役や協力者の不在により活動がほとんど見られない団地との差が明確になった。共益費の徴収、集会所や共有スペースの管理、相談対応等の負担が一部の住民に集中し、疲弊してしまうケースも見られた。

声を掛けても
誰も協力してくれないし、
まとまりがない…。

自分たちだけでは
対処しきれない。
もっと支援者に
関わってもらいたい。

●家庭内や地域内で支えきれない 複合化したケースの増加

離職や傷病、近隣トラブル等をきっかけに、介護、障がい、精神疾患、生活困窮等を抱える世帯が孤立し、生活課題がより深刻化するケースが多く見られた。特に生活困窮については、コロナ禍での休業・解雇が大きな要因となった。

どこに相談したらいいのか分からない。
たらい回しにされたこともある。

できる範囲で手助けしてきたけど、
地域だけでは対応しきれなくなってきた。

●活動の担い手不足による セーフティネット機能の低下

これまで福祉活動を牽引してきたキーパーソン(町内会役員、民生委員・児童委員、福祉協力員等)が高齢化。地域の世話役の不在や、つながりの場の減少に伴って、地域で日常的に行われていた見守りや助け合いといった機能も徐々に低下した。

サロンをやりたくても
集まらない。
つながりを途切れ
させないようにするには
どうしたらいいだろう？

〇〇さんがいたから、
見守り活動
続いてたんだよね。

サロンが
続いていたら、
〇〇さんの
体調の変化に
気づけたのに…。

●高齢者の孤立、健康リスクの高まり

コロナ禍で、地域の集いの場や交流行事、見守り活動は、内容の変更や活動の休止を余儀なくされた。日常生活の行動に気を遣うことも多く、特に高齢者にとっては、外出・交流機会の減少により身体・認知機能が低下し、フレイル状態となることが懸念された。

感染したら困るので、
正直、親にはあまり
出かけないでほしい。



とある集落では、表札が全て同じ!どこまで行っても『阿部さん』だったりします。「生まれたときから知っていて、大きな家族みたいなもんだ」。そこには、コミュニティの一つの形があります。

主な取り組み

復興公営住宅を含めた地域の特徴・課題を専門職と共有することで、今ある事業をもっと活かしていきたい。

課題を抱える本人、気に掛けている住民、関係機関の想いや考えを整理すると、それぞれが動きやすくなるかも…。

地区ごとに合った支え合いの形を考えるために、話し合いの場を地域の中にたくさんつくろう。

担当地区の資源だけでは限界がある。地域を越えて資源をつなげたり、テーマごとのコミュニティをつくったりしていきたいな。

声が埋もれやすい状況だからこそ、住民の声、想いを丁寧に聞き取ることを大切にしたいね。



住まいの形にとらわれない地域生活の支援

- 復興公営住宅内で高まったコミュニティ力や人材を既存地域につなげる支援
(既存地域住民を受け入れるサロン、共同での行事開催、担い手のマッチング)
- 複合的な生活課題を抱えたケースへの支援
(家計管理、手続き困難、住宅確保、ゴミ屋敷、高齢世帯のペット問題)
- 生きがい・役割の創出
(保育園での干し柿づくり、特技を活かした住民講師、登下校時の見守り活動)
- 地域の話し合いの場づくり、ネットワーク構築
(見守り会議、住民と専門職との情報共有、PTAと支援団体の連携、協議体)
- 地域資源の開拓、開発、マッチング
(空き店舗やお寺の活用、ささえあい店調査、買い物困難地域への移動販売調整)



多職種連携による支援体制の構築

- 地域課題解決に向けた協働
(多職種連携会議の在り方検討、課題整理のワークショップ実施、プロジェクトチームの結成)
- 個別課題へのチームアプローチ
(地域ケア会議での支援方針検討、支え合いマップづくり、対象者への同行訪問)

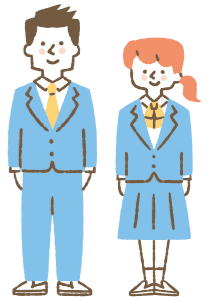


CSCとしての資質向上

- 事例検討会の企画運営を通じたマネジメント力の向上
(事例作成、多職種によるグループワーク、ファシリテーション)
- テーマ別の勉強会による制度の理解や理論の習得
(総合相談センター、コミュニティ・スクール、生活困窮者自立支援制度)
- CSC活動の可視化、啓発、プレゼンテーションスキルの強化
(活動記録作成、活動報告会実施、シンポジウム等での事例発表)

事例

子どもを軸にしたネットワークの構築



きっかけ

子どもの遊び場、フリースクールを運営するNPOより「この中学校区の子どもたちが地域に見守られて元気に育つように、関係者のネットワークを広くつくっていききたい」と相談を受けた

地域情報

震災で大きな被害を受けた沿岸部、修繕して生活を継続することができた住宅街、被害の少なかった農村部が混在している。地区内には復興公営住宅が多数建設され、被災した中学校が防災集団移転地で再建された

取り組み(課題と効果)

- NPOと打合せをし、地域づくりに向けた想いを共有した。このNPOは、災害ボランティア後に子どもの居場所づくりを目指した団体を立上げ、住民・学校・関係者とのつながりを築きながら地域に定着してきた団体であることから、共にネットワークづくりに取り組む意義は大きいと考えた
→子どもを取り巻く様々な関係者がつながることで生まれる効果、実現したい姿を共に考える機会となった。ネットワークの立上げに向けた準備会を企画することとなった
- 趣旨に賛同してくれそうなメンバーとして民生委員・児童委員に声掛けを行った。準備会の中では、気兼ねなく想いを出し合える雰囲気づくりを意識した
→小学校PTA役員、中学校教員、民生委員・児童委員など、多様な年代・立場の人が集まった。同じ問題意識を持った人が共感し合ったことで、短時間で連帯感が生まれ「より広く仲間を募り、団体として立ち上げよう」との方針が定まった
- 再度NPOと打合せを実施。準備会で出た声を活動方針案として整理しておくことで、議論が進みやすくなるよう工夫した。社協と連携関係にあった子ども食堂の代表に声掛けを行った
→新たに中学校PTA役員、小学校教員、子ども食堂の代表が加わり「子どもたちのために何かしたい」という共通の想いを持った大人が、立場を超えてつながり合うネットワークが発足した。準備会の参加者がそれぞれ「仲間に入ってほしい」と思う人に声掛けをしたことで、子どもに対して強い想いを持ったメンバーが集まり、可能性の広がりに期待感が生まれた
- 「震災で休止し、ようやく再開した資源回収に地域の力を貸してほしい」と中学校から依頼があり、実動の機会ができた。メンバーと共に学校行事へ参加協力し、メンバー内のPTA役員が中軸を担えるよう側面支援の立ち位置を重視した
→『立場を超えたつながり』による協働ができたことでチームとしての一体感が生まれ「自分たちも楽しみながら関わることを大事にしていこう」という前向きな意識が醸成されていった
- 「想いがあっても子どもが卒業したら学校には関われなくなるケースがある」との実情に対し『子どもへの想い』を軸にしたネットワークを作ることで、立場や肩書きに関係なく活躍することのできる機会の創出につながった
- 地域に根差して活動を続けてきたNPOやPTAなどの想いに、丁寧にじっくり時間をかけて関わるからこそ、相手を理解し地域の活動者の一員として認められ、対等に議論できるようになった

PTA役員の声

実際に、学校の壁を超えて活動できたことが大きかったです。自分たちのために動いてくれる面白い大人がいるんだな、と知って貰ったら嬉しいです



地域に出るのがCSCの仕事。時にはお茶っこ飲みなどサロンを何件もハシゴします。「これ食べらいい」「甘い用意してだよー」住民さんからの誘惑に勝てず…。今ではこんなに立派に育ちました。



10年取り残されていた被災者との関わり

きっかけ

名前を名乗らず「10万円を借りたい」「今は話せないことがある」と来所。半年間断続的に食料支援を続け、アセスメントした結果、被災したままの状態で見捨てられていることが明らかとなった

地域情報

沿岸部に近い住宅地で、会社や企業などが混在する地域。床上浸水したエリアで、従来の世帯と新たに転入してきた世帯が混在しており、空き地も多い

本人状況

Tさん 50代 女性 無職(就労歴あり) 持ち家 震災の翌年父親が他界し独居
 ・津波により床上浸水した自宅の2階で生活してきた ・被災したままの車が庭にあり、家全体が竹や雑草に覆われ、中の様子がうかがえない
 ・水道、ガスは震災後から不通、電気も未払いのため停止 ・近所づきあいはなく、民生委員・児童委員も関わっていない世帯

取り組み(課題と効果)

●Tさんの生活状況や近隣との関係性などを民生委員・児童委員と確認し合い、多角的に情報収集をするため、市保健師との協議を行った。生活実態の把握を進めることとなり何度も足を運んだ
 →関係性ができたことで「借金があり裁判所から差し押さえ通告が届いている。誰にも今まで話せなかったの」と悩みを聞くことができた。また、テレビなど情報を得る媒体がないことや回覧板を通して隣家とのつながりが少なからずあることなど、Tさんの暮らしの様子を確認することができた

●「この家で暮らし続けたい」との想いを尊重し、制度へのつなぎのほか、段階的に生活意欲につながる『楽しみの創出』を支援方針の中に組み込むことをケースワーカーなど支援者と共有し、実現可能な方法を模索した
 →生活保護などの制度につながり、少しずつ他者を受け入れるようになった。その中で「テレビを観たい」との希望を持っていることが分かり、そのことを目標としたことで就労につながった。その後、通電はできたが、テレビはブラウン管のままアンテナ修理も必要な状態であった

●Tさんの困りごとを、地域の協力者や地域資源(電気事業協同組合)へ投げかけ、誰かを想う気持ちから生まれる行動へと結び付けた
 →住民より「仮設住宅で使っていたテレビを寄付したい」という申し出があり、ケースワーカーに確認したうえでTさんに届けられることとなった。アンテナの修理は、相談していた電気事業協同組合内で協議がなされ「生活の楽しみや目標は誰にでも必要なこと。応援したい」「町の電気屋だからこそできることがある」と安価で引き受けてくれることとなった

●『誰かに頼ってみる』という経験を積む機会をつくるために、Tさんと支えてくれる人たちを仲介する役割を担い、Tさんの意思決定を支援し続けた
 →テレビのある生活が、日々の楽しみや暮らしに必要な情報の取得につながり、共通の話題が増えたことで他者とのコミュニケーションが円滑になる効果が見られた

振り返り、気づき

●1年2ヶ月の時間を要したが、本人の気持ちの速度に歩調を合わせた意思決定支援を丁寧にし続けたことで、表出されていない欲求や意欲を引き出すことができた

●本人のSOSの出しづらさや住民だからこそその関わりづらさに気づき、双方へのアウトリーチの重要性を痛感した

●衣食住などの物理的な自立だけでなく、周囲からの支えを本人が実感することによって生まれる自発性が、社会的な自立につながっていくことと、その過程に関わることの大切さに気づいた

Tさんの声

今は、ドラマを観るのが楽しみで、仕事も頑張っています。たくさんの人に助けてもらえて嬉しかったし、優しい人もいるんだなあと思えました。あの日、組合の方々へお礼の手紙を届けました。父親が残してくれたこの家にずっと住み続けたいと思っています



支援・活動の振り返り

●本人の望む暮らしと周囲をつなぐ

大切にしたこと 本人の望む暮らしの実現のためだけでなく、地域側にも支え合うことの良さを実感できるように調整した。専門職だけでなく、インフォーマルな取り組みへの働きかけも重視した。

難しかったこと 経験を重ね、深刻なケースにも携わるようになったことや、課題解決のプロセスを見据えられるようになったことで、地域側の負担感やリスクを考えすぎて住民への働きかけに躊躇してしまうこともあった。

●話し合いの場から地域の想いを具現化する

大切にしたこと 多様な立場の人たちが、自分たちのことを自分たちで言語化する機会をつくることで、共感を生み、これからの暮らしも見据えた行動変容につながることを大切にした。

難しかったこと CSCが想定した進み方と、各々の住民が求めるスピード感の違いに戸惑った。制度の仕組みや事業計画、場の継続・定着化にとらわれてしまい、落としどころを見つけようと焦ってしまった。

●直に関わることの有用性を再確認し、制限の中でできることを見出していく

大切にしたこと コロナ禍で地域の活動が停滞したが、その制限を震災復興の過程と同様に捉え、活動の意義や多様な価値観を住民間や専門職と共有し、尊重し合えることを大切にした。

難しかったこと 地域に足を運ぶ機会が減少し、住民や専門職と対面せずにやり取りが済んでしまうことが増えた。自分たちの存在意義を見失いそうになり、顔を合わせずに地域に寄り添っていくことの難しさを実感した。

関係機関の声



福井 康江さん
 日本医療
 ソーシャルワーカー協会
 石巻事務所現地責任者

主に市内7地区のエリアミーティングや定例ミーティングで関わらせていただき、個別ケースについては、支援依頼や情報共有をさせていただきました。また、同行訪問や生活環境を整えるための片づけを一緒に行うなど、忌憚なく話ができる同志のような存在と感じています。CSCのみなさんは、地域のリーダーとなる方や、地域のサロン団体などとのつながりも強く、様々な立場の住民の声を把握しており、復興公営住宅での孤立防止やコミュニティのつながりを考えるうえでとても参考となるものでした。



「集会所に手帳忘れてったぞー！」事務所に戻ると一本の電話。住民さんが事務所に忘れ物を届けてくれることも…。CSCも時には地域に見守られ、活動しています。



これまでの10年から『これから』へ



平成24年4月、当時所属していた宮城県社会福祉協議会から派遣され、2年間石巻市社会福祉協議会の職員として、ささえあい総括センターの所長を務めさせていただいた。当時は、応急仮設住宅支援の委託事業が始まったばかりで、けして順調に取り組んでいただけではなかった。大規模な応急仮設住宅等への支援事業はそれまで誰も経験をしたことがなく、石巻市社協も市行政もまさに手探りで、目の前の対応にあたるのが精一杯といった状態だったことを思い出す。

誰かが手を抜いていたということではけしてない。様々な支援者が各々の役割を担おうと取り組んだ結果、支援の重複が起き、あるいは行き過ぎた支援が起こるなどハレーションを起こしている状態だったのである。これらを回避するためにも、

ニーズと支援を調整するコーディネート役、あわせて、被災住民同士が助け合う本来の地域の姿を目指し、住民活動を活性化させる役割が必要ではないかとの発想から協議が重ねられ、地域福祉コーディネーターの配置計画がなされていったのである。

財源の見通しもない中、配置に反対する声も多々あった。また、東北三県が大きな被害を受け、ソーシャルワークスキルを持った支援者が不足し、当然、そのようなスキルを持った人材が見つかる状況でもなかった。質の高い人材を求めるのではなく、いかに短期間で育成し、10年後に震災前よりもいい地域になっていることを目指すべきではないかと発想を転換し、配置に賛同してくれた石巻市社協、市職員とともに予算獲得に向けて説明を繰り返し、初年度10名でスタートを切ることができた。被災後の混沌とした中、厳しい船出であったが12年経った今、この取り組みは間違いではなかったと本記録集作成に携わらせていただき成果を実感している。記録集で触れられたその成果を当時の状況も思い起こしながら、私の主観的な見解ではあるが簡単に述べさせていただきたい。

【1. 徹底したアウトリーチとアセスメント】

配置された当初は「何をしてくれる人なのか」「有資格者でもない人に何ができるのか」といった厳しい声の中、それでも、誰も経験したことのない地域生活の復興に向けて、住民と直に接し、地域へ足を運ぶことを重視してきた。自ら出向き目と耳で感じ取ったことと、コミュニティソーシャルワークの理論を重ね合わせることで、実感の伴うスキルアップとなり自信につながったのではないだろうか。この『実感の伴うスキルアップ』は短期間の育成が求められる中でも効果を発揮したと言える。『答えは住民(地域)にある』という信念の元、その答えを見出すためにアウトリーチを欠かさず、実感した状態像を元にアセスメントにつなげていくことは支援の原点であり、コミュニティソーシャルワークを展開するための基盤として現在にも活かしている。

【2. 支援者(機関)等との信頼関係構築の元の仲介機能】

もがきながらも、専門職や外部支援機関、NPOなどと住民課題を共有し、同じ支援の方向性を見出そうと、あの手この手で支援者間の関係づくりを進めてきた。「打合せやミーティングばかりだ」と批判される声がありながらも、諦めずに何度もお互いの役割や現状、限界を知る機会を作り、時には地域や住民のところへ同行し、住民が元気になっていく姿、すなわち成果を共有している。その過程の中で、支援者間の距離は縮まりお互いが「これならできるよ」と言い合える前向きな関係ができていった。これは共通目標を相互認識し、その目標に向かい役割を補い合いながら連携協働ができる関係性を作り上げることができたと言えるのではないだろうか。包括的支援体制の構築に向けた取り組みが法制度化された今、多機関協働を実現維持するために必須な仲介機能を発揮してきたと言える。

【3. 中長期的ビジョンを踏まえた、住民個々、地域が持つ力の引き出し】

被災を負った住民が現実を受け入れ立ち直るまで、あるいは、その住民同士が集まる地域が従来の力を取り戻すまでに、いったいどのくらいの時間が掛かるのか誰も予測ができなかった。ややもすると、仮設住宅に住む人の『目の前のニーズ』に添えてしまいそうになったが、被災前の石巻の歴史を振り返り、長い年月があって地域が作られていったこと、その地域を住民自身が作り維持してきたことを踏まえ、長期的な視点を意識づけていった。住民や地域が持つ力(ストレングス)を信じ引き出す(エンパワメント)支援を行なうためにも、長期的な視点を持って住民、地域と関わることを大切にしてきたことがうかがわれる。まさに『住民主体』の原則と言える。その成果が現在の復興公営住宅などのコミュニティ形成の実現に表れているのではないだろうか。

【4. 予防福祉の展開とジェネラルソーシャルワークの視点の波及】

課題を抱える住民を支える医療や高齢分野、障害分野など専門福祉領域の支援は不可欠な支援であることは言うまでもない。しかし、これら専門領域の支援は課題が顕在化してから展開されることがまだまだ多かった。潜在的な課題を抱えた住民が一気に増えた被災地では、いかに課題を悪化させないかの予防福祉的な視点が重要であった。アウトリーチを重ね、つぶさに現状を把握している地域福祉コーディネーターには、地域生活支援員とともに生活の変化を察知しやすく、課題が悪化する前の状態に気づきやすい存在であった。両者が持つ情報を支援機関と共有したことで課題悪化前に対処することができ、結果、医療支援や福祉支援が必要な状態に陥る前の対処が図られたのではないかとと思われる。また、この予防的段階(悪化する前の段階)においては限定した専門領域の支援だけでなく、生活全般の環境にアプローチするジェネラルソーシャルワークの視点が重要であり、まさにこれは、地域福祉コーディネーターが日々実践してきたことである。これらの視点が、長い期間をもってミーティングや打合せ、現場の同行などの機会を経て専門職の視点にも影響していったのではないかと思っている。

雑駁ながら私のこれまでの関わりを通して成果に触れさせていただいた。しかしながらこれで完結したと言うことはできない。既に、人材育成が課題であると触れられている通り、今後も顔ぶれが変わりそのたびに、経験やノウハウを継承しつつ育成にあたらなくてはならない。目まぐるしく変わる地域福祉制度の中で、震災復興というこれまでのプロセスを踏まえた、石巻特有のスタイルを今後も作り続けなくてはならないということである。

これもまた、これまで誰も経験したことのない未知なる取り組みであり、能登半島地震はじめ、今後起こりうる『災害後の地域づくり』さらには災害に強い地域づくりに必ず活かされる貴重な取り組みであると思っている。

地域住民から「もう大丈夫、私たちが自分たちで取り組めるから」と言っていた日を目指して、今後も地域に足を運んでくれることを願っている。

日本社会事業大学大学院 福祉マネジメント研究科
講師 北川 進



こぼれ話 CSCになり高まったチカラ。それは『コミュニケーションスキル』。いつでも、どこでも、誰にでも、ついつい声を掛けてしまいます。でも、そんな他愛もない雑談の中に、大事な想いが隠れていたりするのです。

むすびに



震災から13年余り、その復興と地域の再生を担う地域福祉コーディネーターを配置してから10年が経過しました。

この間、行政のみならず、市民ひとりひとりの支援と理解により、被災者支援、地域支援など様々な活動を行うことができました。過酷で困難な時を地域福祉コーディネーターが多くの方々と地域で一緒に過ごせたことに改めて感謝申し上げます。

当時の大きな課題は、疲弊した地域の再生と被災した市民の生活再建が何より重要であり、ひいては失われた安心・安全の回復が求められていました。震災前には当たり前であり、また失われつつもあった近隣の互助や地域で進めてきた支え合い・共助の仕組みなど、目に見えない安心感の重要性を改めて考える契機になりました。

地域に身近な組織である社協に配置された当初は、仮設住宅や点在する地域の中でつなぎ役として足しげく通い、顔を覚えてもらい、そして相談に乗りながら住民の信頼を積み重ねて参りました。また、様々な団体や機関の方々と課題を共有するなどその活動は多岐に亘り、ソーシャルワークを実践する日々でもあったと思います。その後、復興公営住宅が完成し、仮設住宅が解消し、新たな街並みの形成など目に見える風景はおかげをもちまして大きく進展しました。しかし、残念ながら震災復興に取り組む中で人口減少、少子高齢化などは、全国的とはいえ、一つの大きな課題でありました。

4年に及ぶコロナ禍は、さらにこの課題を深刻化・複雑化させ、生活困窮に加え、孤立・孤独、8050、ダブルケア、ヤングケアラーなど若年層の課題も浮き彫りにさせております。これらの課題解決について、アウトリーチによるソーシャルワークの活動など、地域での支えの役目が求められるようになってきていると考えております。平成27年より議論されてきた地域共生社会の実現に向け、包括的支援体制の構築に取り組む形で法制化されました。いみじくも震災後、取り組んできた地域包括ケアや地域で活動してきた地域福祉コーディネーターの活動の必要性を示すことになったと感じております。

福祉を創造する・地域共生社会での助け合い・支え合い

「地域を支えている人をどれだけ支援するか」。社会課題が多様化し、複雑化する少子高齢化の時代で人間そのものに対する向き合い方が必要なことは言うまでもありません。その中で震災を契機に寄り添うアウトリーチの活動が役目となる職員を各地区に配置できていることは幸いです。

地域共生社会の実現に向け、地域福祉活動計画を着実に進めるとともに、令和6年度より石巻市と重層的支援体制整備の準備事業を行なうことを検討しております。地域にとってニーズの高いこの事業の取り組みが、石巻市にとってより良い仕組みになることを望むとともに、行政をはじめとする関係者の方々のご理解とご協力、また、この記録集の発行にあたりご尽力いただいた方々に厚く感謝申し上げます、むすびの言葉とさせていただきます。

石巻市社会福祉協議会
常務理事兼事務局長 久保 智光

①地域福祉コーディネーター活動記録

平成27年度より、CSC活動の数値化を実施。令和4年度に記録様式の見直しを行い、当事者へ直接関わることや他機関等との調整を行う『個人支援』と、居場所づくりや町内会(自治会)支援を行う『地域支援』への関わりをより詳細に把握できるよう強化を図った。

活動記録集計結果 (R4.4.1~R5.3.31)

年間 20,262 件

個人支援

相談内容(抜粋)

- ・お茶のみ仲間がほしい
- ・子どもに食べさせるものがない
- ・家を直すお金がない
- ・死にたい
- ・畑を貸したい
- ・子ども食堂を企画したい
- ・特技を披露したい
- ・安否が分からない
- ・訪問活動に同行してほしい
- ・「さみしい」誰かに訪問してほしい
- ・家を片付けたい
- ・地域のサロンに参加したい
- ・同じ障害を持つ方たちと話をしたい
- ・ボランティアをしたい

地域支援

相談内容(抜粋)

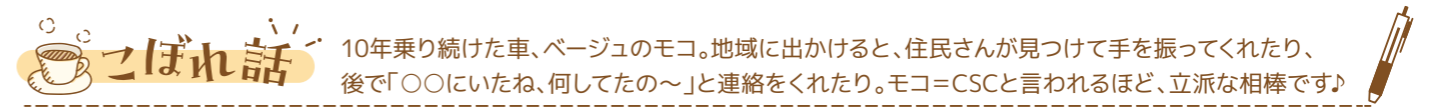
- ・サロンの運営に悩んでいる
- ・活動を再開したい
- ・復興住宅でのつながりをつくりたい
- ・見守り活動に協力してほしい
- ・活動場所がない
- ・地域への貢献活動を考えたい
- ・地域の活動に生徒たちを参加させたい

個人支援						計	地域支援				計						
直接支援			間接支援				関係形成	立上支援	運営支援	連絡調整							
関係形成	個別支援	連絡調整	関係形成	個別支援	連絡調整	311	433	239	203	631	958	2,775	2,362	226	2,680	3,909	9,177

人材育成	啓発	一般事務	研修	全域CSC	社協事業	その他	計
218	206	6,312	247	6	1,230	91	8,310

地域福祉コーディネーター活動記録作成マニュアル

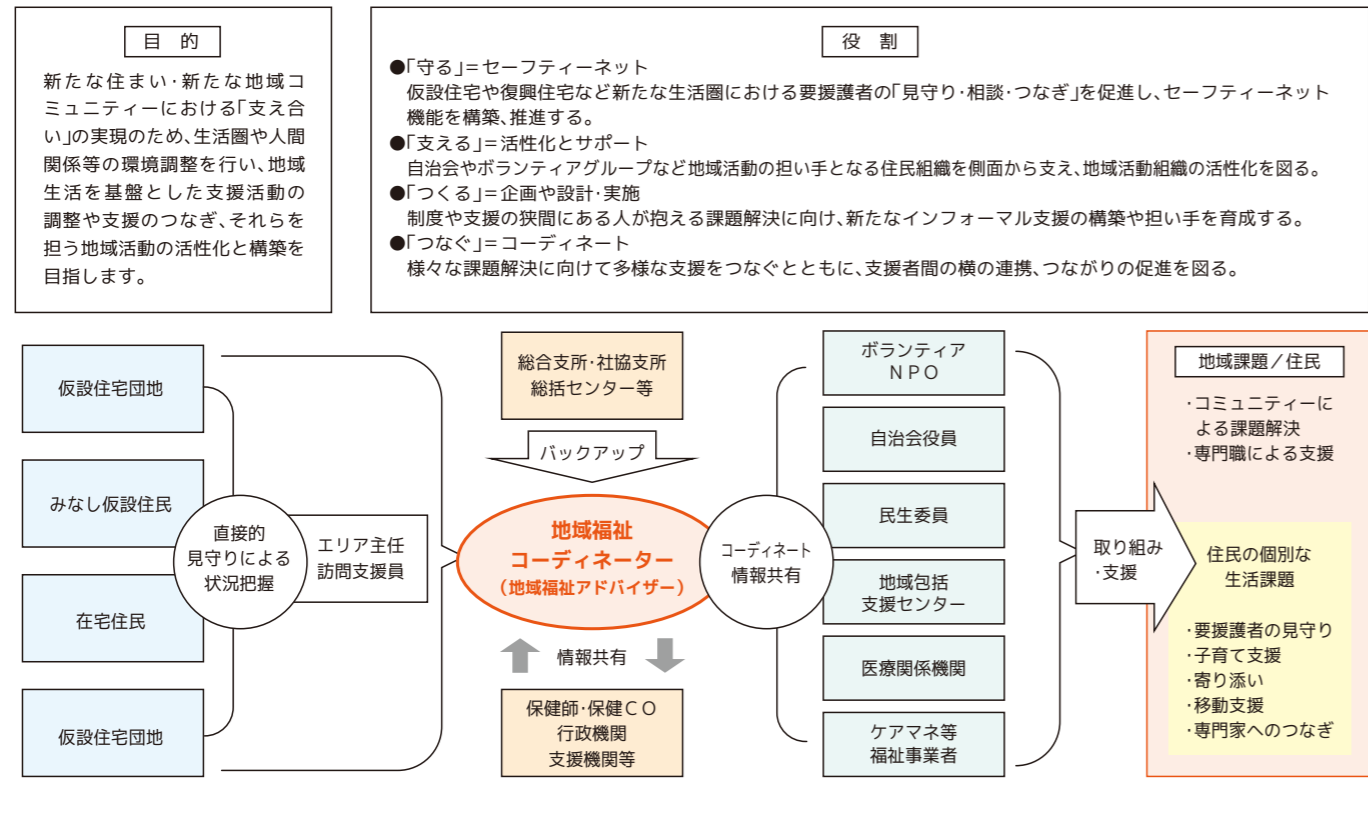
<p>個人直接支援 地域福祉コーディネーターが当事者へ直接関わること</p> <ul style="list-style-type: none"> 関係形成 当事者との関係づくりのための訪問 個別支援 支援のための訪問、相談、状況確認 連絡調整 本人との連絡調整、簡単なやり取り <p>個人間接支援 地域福祉コーディネーターが当事者のために他の機関や団体と相談、調整すること</p> <ul style="list-style-type: none"> 関係形成 関係団体・グループとの関係づくりのための訪問・会議参加、イベント参加、ネットワーク活動、小地域エリア内会議への参加 個別支援 関係者との相談、カンファレンスの実施 連絡調整 関係者との連絡調整、やり取り <p>地域支援 サロン支援、居場所づくり、町内会支援、復興住宅支援、団体支援、(外部との)企画打ち合わせ(調整含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> 関係形成 地域住民、団体・グループとの関係づくりのための訪問 立上支援 地域団体・グループの立上げの支援 運営支援 地域団体・グループが立上ったあとの運営支援 連絡調整 関係者との連絡調整、簡単なやり取り 	<p>人材育成 ボランティア対応、学生対応、NPOからの相談対応</p> <p>啓発 地域福祉コーディネーターPR、社協PR、取材対応</p> <p>一般事務 事務作業、内部会議、内部打合せ</p> <p>研修 (社協職員のための)地域福祉コーディネーター・生活支援コーディネーター育成のための研修、スーパービジョン、他地区社協へのヒアリング、視察</p> <p>全域 活動に関わることの仕組みづくり</p> <p>全域CSC 地域福祉コーディネーターとしての仕組みづくり</p> <p>社協事業 社協内事業の仕事</p> <p>その他 石巻市以外での仕事、全国的な活動、外部団体との研究、学会発表準備等</p>
---	--



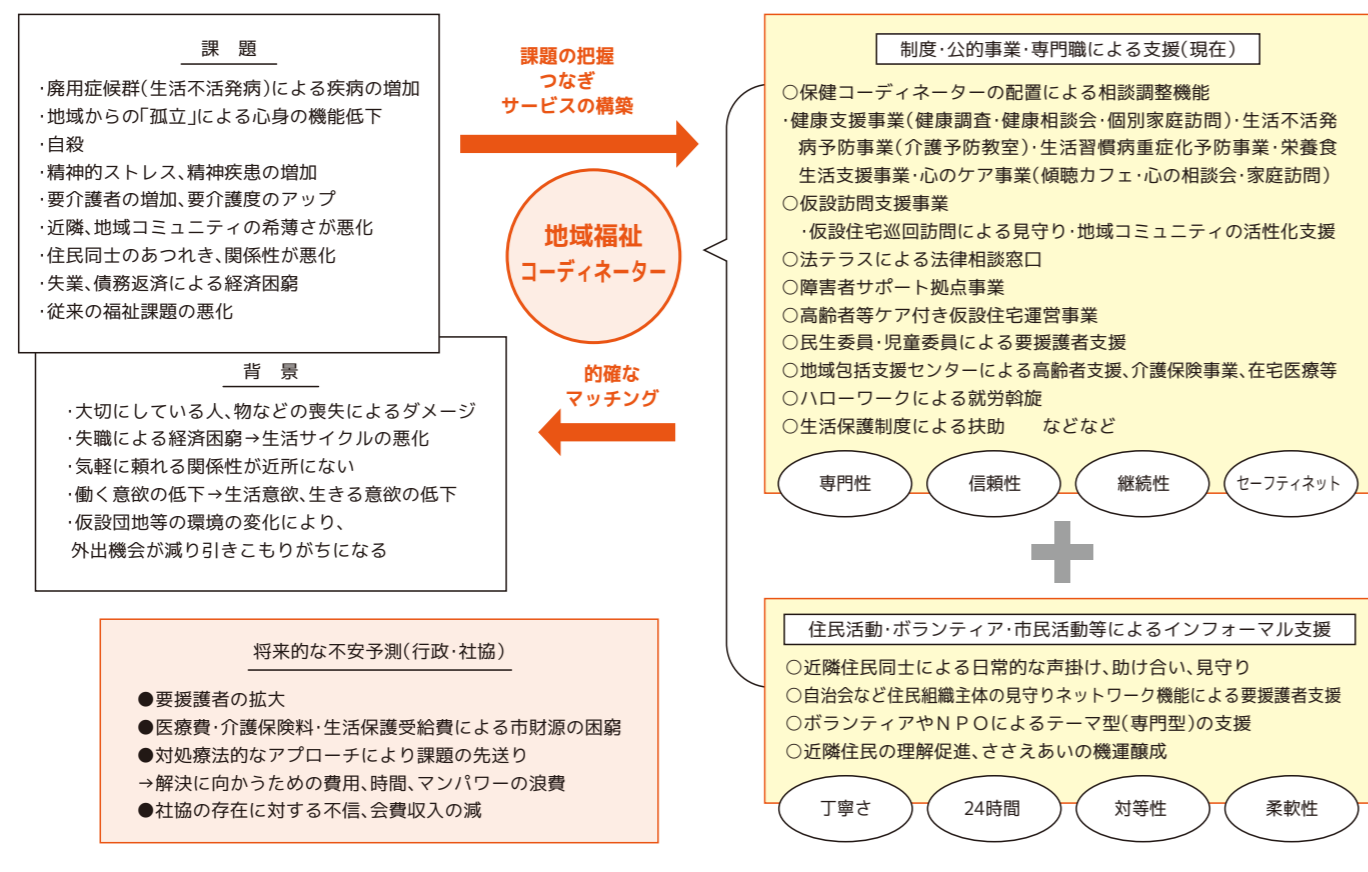
②地域福祉コーディネーター(CSC) 概念図

CSCの設置当初、これらの資料を用いて行政、関係機関等に説明を行い、理解と連携の促進を図った。

<地域福祉コーディネーター(CSC)配置概要>



<課題予測と対応の必要性>



③広報誌、メディア掲載

●社協だより

平成25年7月号



●福祉みやび

平成28年9月号



●NHK

ハートネットTV
シリーズ・震災(3) 支えあいの“縁”を創る
～石巻市・地域福祉コーディネーター～
(平成26年3月5日放送)

ハートネットTV
シリーズ・被災地の福祉はいま
第1回あったかい地域をつくりたい
～仮設から復興住宅へ 宮城・石巻～
(平成27年3月3日放送)

明日へ支えあおうー
「あったかいまち」をつくりたい～宮城・石巻市～
(平成27年5月10日放送)

明日へ つなげよう 復興サポート
「がんばっぺ! 熊本～東北からのメッセージ～」
(平成28年10月23日放送)

令和5年3月号



こぼれ話 CSCを卒業した人たちが、どんなことしているのかをご紹介します。○○市議会議員、△△会社社長、◇◇市社会福祉協議会、☆☆ちゃんのお母さん...みなさん元気ですか?